国文学研究資料館報
第3号
昭和49年9月30日

書籍の装幀

山岸徳平

書物や掛物の仕立て方の事を、普通に装幀（そうてい）と呼んでいる。「幀」は正しくは、音が「とう」または「ちょう」であるが、旁（つくり）が「貞淑」とか「貞節」の「貞（てい）」であるから「幀」をも「てい」と発音するが、百姓読みとして、それも通用せられている。掛物などを数える時に、中国は一幀・二幀ともいうけれども、日本では一幅・二幅と呼ぶのが普通である。この装幀を「装釘」とも書く。釘は「くぎ」で洋綴りの製本には、針金や釘の類を用いるので、「装釘」と称するに至ったものかと思う。その「装幀」を、別に「装訂」の用語を用いているものに、孫毓修の中国雕板源流考がある。

また装幀と同様な意味の言葉に、「装潢」もある。字の意味では、「装」が、紙でも絹でもを裁ち切って揃えるとか、整える事を意味し、「潢」は、紙を染める事を意味する。けれども「装潢」と熟して「装幀」とか「表装」若しくは「表具」の意味に用いられていた。中国の清朝時代に周嘉冑が「装潢志」一巻を著作した。然しこれは、書画の表装とか表具の仕方などを記したもので、書籍の装幀には触れていない。そんな次第で、日本でも表具屋の看板に「装潢匠」とか「装潢師」と、洒落れた文字を用いたものが、稀には今日でも見られる。ついでに言えば、今日では表具師を経師屋とも呼ぶ。元来、経師とは、仏教の経典を巻物や折本に仕立てる職人を称した。経師の親分格の人が大経師と呼ばれた。それが、後には経師も経師屋と呼ばれる様になり、表具屋とか表具師と同じ仕事に従事する様になった。従って、それは掛物などを専門に取扱っているのである。

さて、書物の装幀も、元来は中国からの伝来であったが、中国でも、色々と進歩発展して今日に及んでいる。それを学んだ日本でも同様に変遷してきた。いずれにしても、書籍の最初は、竹簡や木簡を別とすれば、紙や絹や布などに書いたものに始まる。紙の使用が最も多く、且つ広く流布もした。今、紙を使用したものを主として見て行く。

一、続ぎ紙。最初は、紙に書いたもの幾枚かを続ぎ足して、それを巻くとか畳んで置く。巻けば巻物の如くになり折り畳めば折本の如くになる。この続ぎ紙に関しては、源氏物語の「梅が枝」の巻に、次の如き記事を見る。

（源氏が）さま〴〵の継ぎ紙の本どもえり出でさせ給へるついでに…。

これは、習字の手本に関して述べたのであるが、習字でなくて和歌などでも、続（継）ぎ紙として、簡略に仕立てたものもあったに相違ない。然し、保存とか大切にする類のものは、自然に、巻き物に仕立てられたのであろうと思う。

二、巻き物―巻子本・巻子装。中国では巻軸装と称せられる。巻子本を外部から見て行くと、まず紐（帯）がある。紐の先端に、象牙などの爪を着けたものもある。この紐の着く所は、巻物の前端で、そこには細く丸めた竹か、半円形の木の細い棒が巻き込まれている。それから内部に向って、若干の長さの白紙の部分がある。この部分を巻首包装紙または、前部包装紙などとも呼ぶ。それは、普通の本ならば、前部即ち表面の表紙に相当する。この包装紙には、野毛や切箔や砂子や金箔・銀箔などを散らして、装飾を施したものもある。あるいは山水とか草花などを描いた

―目次―

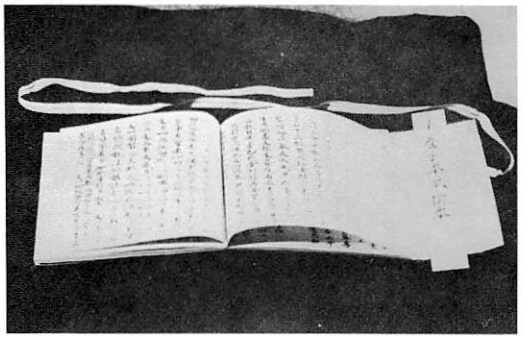
ものもある。その次に本文が続く。本文が終ると、また白紙の部分が若干の長さだけ存在する。その部分が巻末包装紙または後部包装紙である。これも普通の本ならば後部つまり裏面の表紙に相当する。巻末包装紙にも、巻首のと同様に装飾の施されているものもある。巻末の包装紙の末端には、軸がある。紐や軸にも品質や色彩や材料などに、色々と高貴なものも用いられた由は、明朝の方以智の通雅巻三十二に色々と述べてある。

三、折本、中国で経折装というのは、仏典に多いからであろう。また「摺（しょう）本」とも呼ぶ。摺は折り畳む意である。折簡とか柬帖ともいう。柬は簡と通用する文字である。摺を日本では「す（刷）る」と読み、印刷の意味に用いているから、「摺本」を日本の用例で解釈すれば、印刷した本の意となる。そこに、日中の相違がある。

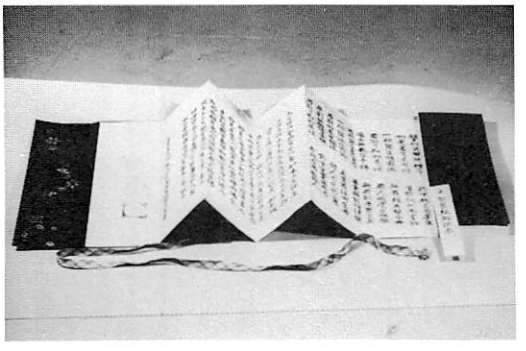
とにかく、折本とは巻子本の開閉の不便を除こうと考えて、まず巻子本を折り畳み、巻首と巻末の包装紙を、それぞれ前後の表紙としたのである。

所が、巻子本から折本に転換する途中の装幀で、言わば、巻子本式折本と包装紙附折本とも言うべきものがある。

(1)、巻子本式折本は、仁和寺蔵弘法大師筆の国宝三十帖冊子がそれに当る。これは本文の部分が折本になるのに対し、腹部の折目を切開した。すると粘葉（でっちょう）装となる。巻首と巻末の包装紙が、背部で連繋して一枚の表紙となり、粘葉装の部分を包んだ形式となった。粘葉装の部分の背部は、表紙に密着させられている。また巻子本時代の軸は、除去せられてしまったが、巻首の部分の端の細い竹の棒と紐とは残存している故に、これを便宜上、巻子本式折本と称して置く。



(2)、包装紙附折本は、書陵部蔵の宋版一切経や、前田家蔵の宝積経などがそれである。書陵部には集一切福徳三昧経もある。今、前田家の宝積経を見ると、後村上帝の興国三年（一三四二）十月八日、足利直義が、高野山の金剛三昧院に奉納したものなのであった。その裏面には、兼好法師・頓阿・慶雲・二条為明などが、それぞれ和歌を記している。これは、本文が折本となり、巻首と巻末の包装紙は、連繋せられて一枚となり、折本の部分を包む。巻首の包装紙は前端即ち縁（へり）に竹を立て、帯も着いている。また、この包装紙が巻物時代の先端の竹と紐を持ったまま独立して、本を包む様になっている。一般の折本は、仏典や法帖に多く、また、集印帖や揮毫帖などに多く用いられている。



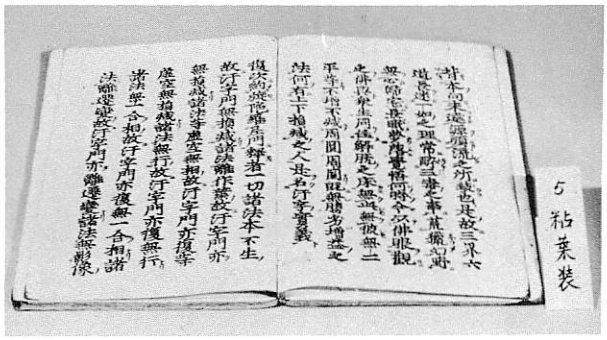
然し、折本は、前後の表紙が相互に直接の連繋が無いから、折本全体としては、揺れ動く状態に在って、自然、破損の懸念も少くない。因って、安定させるために、前後の表紙の背部だけを、連繋させた装幀も出来た。また、今述べた(1)や(2)の場合に、包装紙だけを切り離して独立させ、「帙（ちつ）」が作られる様にもなった。帙とは、「小袋」の意味を示す文字である。この帙が、更に簡単になって、上下の開放せられた紙袋となった。この紙袋は、江戸時代の色々の版本などに、多く使用せられている。それは一つはその版本を大切に保存するため、一つは体裁のためでもあった。今日の洋綴の本にも、やゝ厚い紙の袋が、体裁上使用せられている。帙にはなお、竹を細く削って巻子本の高さより多く高くして簾を作り経巻を巻き包むものもある。これを帙

簾（じす）と呼ぶ。

四、旋風葉装、これは、単に旋風装とも称せられる。前後の表紙が背部で連繋せられている。同時に、折本に相当する最初の一葉の表面を前の表紙に、最後の一葉の裏面を後の表紙に貼りつける。そうすると、全体は固定するから、折本の如く動揺しなくなる。けれども、折本に相当する部分は不安定状態に在るから、風が吹いて来れば、吹き上げられる様な事にもなる。旋風とは「つむじ風」で、その旋風のため、折本に相当する部分が吹きまくられると言うのである。明の張邦基の墨荘漫録巻三には「旋風葉ハ、北宋の刊本ノ書ヨリ行ハレタリシガ、装幀ノ技ハ絶エタリ」と述べている。この装幀は一時の流行で、長続きしなかったらしい。然し、鎌倉初期頃以降のもので、巻子本を折本に改めたり、折本を旋風装に改めたものもあった。大東急記念文庫蔵の写経中、放光経巻九や、大方等大集経巻四や、大般若波羅密多経巻三十八や、弥勒上生経略賛などは、元来、巻子本であったのを、折本に改装したのである。書陵部蔵で、唐の懐行筆の勝曼宝窟も、巻子本であったものが、折本に改装せられている。また、普通の草子等の類でも、大阪市・天王寺区・平野の宝慶寺蔵の「甦（よみがえり）草子」は、足利中期頃のものであるが、袋綴（ふくろとじ）の草子を、巻子本に改めた一つの例である。

また智恩院蔵の十二門論義疏は、法然上人自筆で、巻末には「寿永二年（一一八三である）三月三日……」とある。もとは巻子本であった。それを法然上人が、旋風葉装に装幀し直したのである。大東急記念文庫蔵の大般若波羅密多経第三百九十七で、巻末に「一校了　治承五年七月廿九日申時書写了　筆師金剛佛子義心」とあるのも、巻子本を旋風葉装に改めたものである。

五、粘葉装、粘は黏の俗字で、音は女廉（ぢょれん）反とか尼占（ぢせん）反であるから、「デン」で「ねばりつく」とか「ねばりつける」の意味の字である。然し康熙字典には、別に正韻には尼欠（ぢけつ）反とあるから、音は「デツ」となる。従って「粘葉」を、「でつえふ→でつちよう」と発音する事も自然である。「でんえふ」が急速の連呼で、「でっちょう」と発音したと説明した字典は、如何かと思われる。



この粘葉装の発生は、折本から考察するのが便利である。即ち折本から旋風葉装が発展した。その旋風葉の背部の折り目で各紙を糊づけする。また腹部の折り目を切開する。そうすると、粘葉装が出来上る。それは、文字のある部分が内側になり、文字の無い部分、即ち折本の時には裏面であった部分が外側となる。この装幀を開くと一枚の紙が二折せられていて、言わば、胡蝶が羽を開いたかの様な感じになる。因って、粘葉装の事を一名胡蝶装とも呼ぶのである。普通は、文字面の裏面は白紙であるが、後には文字を書いたり、印刷もした。胡蝶は中国の本には蝴蝶の文字も用い、また蝶装とも言われている。明の方以智の通雅の巻三十二器用部にも「粘葉、謂蝴蝶装」と記している。胡蝶装の正しい見解を、藤井貞幹は、彼の好古小録の雑考に使用し、儒者の吉田篁墩も彼の近聞寓筆に同じ様に述べた。山崎美成の海録巻十九にも、「粘葉ハ之ヲ蝴蝶装ト謂フ」と、漢文に記した。書家市河米庵の米庵墨談続編巻三も、通雅を

引用している。どれも正解である。

然るに、岡本保孝は、彼の難波江の巻二の下、「書籍沿革の条」には、藤井貞幹の正しい説明に反対して、「藤貞幹ノ好古小録雑考第廿二三粘葉ハ胡蝶装也トアルハワロシ」と記した。保孝の、胡蝶装に関する説明だけは、誤ってはいなかったが、「粘葉ハ胡蝶装也トアルハワロシ」の説明に誤解があり、また誤って「…本邦ニ、コノ仕立ナシ」とも述べた。この誤った保孝の考設が国語辞典の古い時代のものに採用せられている。また、昭和の初年頃までは、大福帖式の大和綴の装幀に対して、胡蝶装と呼んでいた人々もあった。従って胡蝶装とある説明も、今次の戦前頃までのものには、誤解のままのものも存在するのであった。例えば、日本文学辞典なども、大和綴を胡蝶装の如く誤った説明になっている。

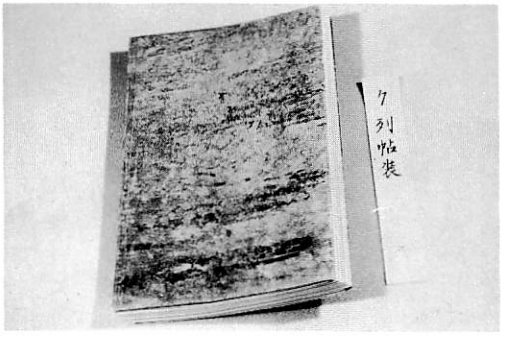
六、袋綴（ふくろとじ）、または袋草（冊）子とも呼ばれ、昔から版本にはこの装訂が一般に広く用いられていた。日本には藤原清輔の歌論書に「袋草子」があった。中国にも、朝鮮にも、この装訂が最も普通であり流布もしていた。糸を用いて綴（とじ）るから、中国では「線装」（銭基博の版本通義）とか「綫装」とも「訂綫」（共に陳国慶の古籍版本浅説による）とか線訂などとも称せられている。

それは、一枚の紙の文字のある面を外側にして二折し、折り目の部分を腹として、それを幾枚も幾十枚も重ね、折り目の反対の一方の端、主として右端を線で綴じるのである。粘葉装は、文字のある面を内側にして折り、折り目の部分を背とし、各葉のその背の部分の外側を糊づけにした。この袋綴の装幀は、勿論、粘葉装以後のものであるが、何時から始まったかは、別に文献に徴すべき資料は見当らない。一般に、表紙は前後が一枚ずつ別々に独立しているが、時には前後の表紙が連続した一枚となり、本全体を包んでいるものもある。これを別に包背装とも称し、前記の古籍版本浅説によれば、元や明時代の版本に最も多い由を述べて、色々の実物を例示している。

この袋綴には、綴じる孔が、普通には四個ある。これを四針孔とも、四針眼訂法とも称するが、一般には「四つ目綴じ」とも唐綴（からとじ）とも、明朝綴（みんちょうとじ）とも呼ぶ。また、上端と下端の右端にも孔を作ったものを六針孔とも六針眼訂法などとも呼ぶが、普通には康熙綴（こうきとじ）と称する。中国製の明朝綴は、第二と第三の孔の間の距離は、第一と第二の孔の間、及び第三と第四の孔の間よりも、少し短くなっているのが常である。日本のは孔間は等距離である。朝鮮の本には、五針孔が普通である。小本では三針孔の本もある。

七、列帖装、または綴葉装。綴葉は「てっちょう」と呼ぶ。これは日本流の装幀で、大和綴（やまととじ）に当り、日本に昔からある大幅帳式の装幀である。大福帳を横にした如き、この装幀は、中国には見当らない。

これは料紙を五六枚もしくは十枚程度を重ねて一括（くくり）として二折しそれを一帖（いちじょう）と見る。学校などの習字用の半紙は、二十枚を一帖（いちじょう）と言う。それにならって五六枚でも十枚程度でも一帖とする。その、五六枚乃至は十枚程度の各帖を幾つか重ねて、それを糸で綴じる。これは、各帖を並列させて綴じた意味で、列帖装と称せられるのである。綴葉装と呼ぶ



よりも、列帖装が、実際に則した称呼である。綴葉装が粘葉装と混乱せられる様な懸念も殆どなくなると思う。列帖装の綴じ方は、榊原芳野の文芸類纂に、図示したわかり易い説明がある。

この大福帳式の装幀、即ち列帖装を、前述の如く大正から昭和の初年頃には、まだ胡蝶装と誤解して説明している人も、少くなかった。従って、当時の人の「胡蝶装云々」の説明は、再検討の必要がある。また望月三英の三英随筆に、次の様な記事がある。そこには誤解があるけれども、念のために掲げて置く。

大和綴といふ書物有之。先は歌書に古へ多く有。町人の覚書も大和綴なり。さては和法かと思へど、左にあらず。阿蘭陀本草、大和綴なり。宋版の千金翼方と楊子家蔵方と、御文庫に有之本は、唐本の大和綴なり。さては、唐より初りて、外国へも伝はりたりと見えたり。

この綴目の名目、阿蘭陀にも何とぢとか云なるべし。中華の名目を博識の人に聞たれども、考無之由。名物六帖などにも出るやらん、申す人もありし。

ここに「阿蘭陀本草、大和綴なり」とあるのは、洋書の綴じ方が、列帖装的である点を指示したのである。また「千金翼方と楊子家蔵方と、御文庫に有之本は」とあるのは、紅葉山文庫本を指したのであろうが、それは現在の内閣文庫には存在しない。尤も、明治二十四年、内閣文庫本で図書寮即ち今日の書陵部に移管せられた類もあったが、宋版の千金翼方などは存在しない。現に存在するものは、元の成宗の大徳十一年（一三〇七―日本、後二条帝の徳治二年）版の千金翼方十二冊であり、楊子家蔵方二十一冊は、宗の淳熙十二年（一一八五―日本後鳥羽帝の文治元年）版本で、金沢文庫旧蔵本である。然し、三英随筆の記事の様な本は内閣文庫にも書陵部にも全く存在しない。内閣文庫には、明の万暦版の千金翼方で、袋綴、即ち綫装がある。故に、三英随筆の記述は、一部信用が出来ないのである。

以上は、まだ尽くさないが、書籍装幀の極めて大要だけを、略記して見た次第である。

（国文学研究資料館評議員、東京教育大学名誉教授）

国文学研究と電子計算機

田嶋一夫

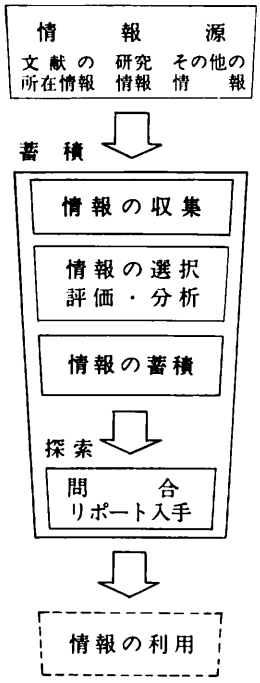
一、最近の国文学情報の性格

国文学研究において情報の検索が、現在どのような形で行われているかをおおまかに図示してみれば、およそ次のようにまとめられるであろう。（図参照）

現状では、しかしながら、情報の蓄積が多く個人の段階で行われており（従って蓄積の分散、個別化をもたらしている）、探索に応じうる機関がほとんどないことである。このために研究者が情報を利用しようとする場合には、著しるしい不便さと、個人的努力が強要されている。

一方、最近の国文学情報の性格の傾向として、次のようなことが指摘できるであろう。第一は、情報の多量化である。研究者人口の増加とともに、研究活動の進展は、従来の研究領域についてはもちろん、研究理念の拡大、深化とあいまって、情報生産源を増加させ、情報量を増大せしめている。また国文学の情報は科学技術情報と違って、事実や結果そのものよりも、それにかかわる解釈、理解、分析という思考のプロセスも重要であり、有効寿命も永いという性格をもつために、被検索対象を指数関数的に増加せしめている。

第二は、研究の進展にともなって、情報の質的変化、すなわち研究の専門化、細分化によってひきおこされる主題の複雑化をもたらしていることである。しかもこの傾向は、関連



する学問分野からの情報収集の重要性ともあいまって、より強められ、より複雑多様化していることである。そして第三は、前記二つの傾向と複雑に結びついているが、発表機関及び発表誌の多様化である。それだけ情報の入手が困難となり、個人の段階では、研究の現状を把握しておくことが、困難になりつつある。さらに第四は、以上の三点の中にすでに内在的に説明されているが、評価の困難さの問題である。

大まかに見て以上の四点が国文学情報活動の最近の傾向として指摘できるであろう。この傾向下においては、ともすれば、その処理、情報入手の遅れ（伝達の遅れ）がもたらされ、研究の無用なロスが生じるし、ひいては研究活動を不十分ならしめることになりかねない。このために、研究者の情報要求も複雑多様化し、微細なものになり、本来、網羅性、迅速性、適格性が要求される情報の検索のためにサービス機関の活動の必要性が生じ、その中で効率的な機械化処理を考えることが要求されるであろう。（当館設立の意味と役割の一端がここにあることは言うまでもない）

二、国文学における情報検索

国文学研究者の共同利用の機関である当館の性格上、個々の組織体内のそれとは異り、利用者の範囲は、一応の限定は設けられるとしても、特定のものとはならず、利用者の情報要求は複雑多岐なものとなり、かつ要求のレベルが高くなることは必定である。したがって先に指摘した傾向ともあいまって、収集資料も単に国文学のオリジナルなもののみとは限らず、多様性をもってくるであろう。このような情報要求の複雑多岐性、収集資料の多様性と情報処理能率のアップという対立的な要請を、システム的に解決するということは、決してなまやさしいことではなかろう。

電子計算機が、他の情報処理機器に比し、以上のような要請に応えうるもっともすぐれた能力を内在的にもっているであろうことは前提として言えるであろう。しかし言語情報の処理技術が必らずしも十分な発達を示しておらず、かつ国文学研究への電子計算機の利用に関する研究がスタートしたばかりであって、まだ、一、二の初歩的実験を行っただけの段階では、相応の困難が山積しているであろうことは言うまでもない。今後さらに研究と実験をすすめていくにつれて、多くの問題が生じてくると思われるが、現状において、国文学の情報検索として、研究者が必要とし、かつ設計可能と思われるシステムとしては、次のものが考えられるであろう。

- (1)文献検索
  - (a)文献資料検索システム
  - (b)研究資料検索システム
- (2)語彙検索
  - (c)語彙検索システム
  - (d)事項検索システム

情報検索が主に自然科学の分野を中心に発達してきたために、文献検索と言えば、一般には研究論文の検索を意味している。しかし国文学の場合には、文献資料（原資料）の検索が、研究情報、研究文献の検索と同様に重要な意味をもっているので、二つのシステムに分けて考える必要がある。前者(a)の場合、国文学の関連資料が約五〇万点あると考えられている（当館市古館長見解）。『源氏物語』や『平家物語』といった諸本の所在の状況、書誌的事項、特色等のコメントをつけて入力しておく。こうしておけば、マニュアルな作業としては事実上不可能に近い研究の進展に伴って生ずるファイルの変更、追加が迅速、円滑に行える。またシステムの設計次第では、文字どおり即座に必要とする情報がとり出しうるし、随時目録類の印刷・作成も可能である。(b)においては、年々生産される国文学関係の研究論文は約五〇〇〇点、単行本で五〇〇冊位ある。しかも研究の有効寿命の永さから考えれば、遡及的検索も不可欠である。また、マニュアルな作業として行いうる研究文献目録は、多くの場合、タイトルからだけしか検索できない。国文学情報の場合、タイトルと主題内容との相関は、その学問の性格からして、決して高いものとは言えないであろうから、探索対象をタイトルだけに限定しては不十分である。個々の論文の内容を要約する。或は主題を適確に表現しうるキーワードを付す必要がある。これらの点を考えれば、研究情報を蓄積し、またキーワードと索引語を駆使することによって、複雑な探索が可能となる。また文献目録類の作成にも速報性を付与できる。

(2)の語彙検索の場合は、(1)の場合が、比較的研究の前提的な面に寄与するのに対し、作品そのものの分析の補助を行いうる。手作業で語彙の抽出や語彙索引の作成のことを考え

てみれば、配列の複雑さから考えてみても、個々の作品ごとに作ることしか考えられないと思う。電算機化したことを想定してみれば、語彙の検索が、二種以上の作品の中から、迅速に検索できるという点で大きなメリットを生む。このシステムを情報検索の中に組み入れることは国文学独自のものとして、大きな意味を持つものと思う。

電子計算機を使った国文学の情報検索としては、データ作成の問題を別にして考えれば、当面以上のようなものが可能であり、かつ利用価値の高いものとなるであろう。

三、検索の効率化

ところで情報検索が、〝利用者にとって必要な文献が、そして必要なものだけが〟とり出せるシステムであることを考えれば、検索効率をぬきにしては考えられない。また蓄積されている情報群の中から、情報が探索されてくるという基本的な原理は、蓄積されている情報群を〝情報の集り〟、つまり集合としてとらえ、その集合の中から回答となるような情報の集りからなる〝部分集合〟を見つけ出す問題として理解できる。従って情報の集りをよりせばめていけば、部分集合もよりせばまったものとなる。つまり検索効率はより高められたこととなる。しかし科学技術情報の検索が比較的事実検索的色彩が強く、適格情報であれば、一件で十分と思われるのに対し、国文学の場合には、質問主題に関連する情報は、網羅的に検索する必要があり、検索効率のみならず、再現率が無視できず、検索漏れを防ぐことが大きなウエイトを占めてくる。検索の際に重要な意味を持つ用語について、情報検索を考える立場から、国文学の用語の特性を考えてみると、研究者によって用語の概念規定が異るという多義性、同一概念に与える用語に統一がないという無統一性、ここからくる用語の類義性、等々の性格があると思われる。

以上のように考えてみると、国文学の情報検索の場合には、索引語として単にキーワードのみを利用することでは不十分であって、用語の各概念関係が明確にされ、体系化され、統制化されている関連語辞典、つまり国文学 thesourus が必要であって、その作成が不可欠であると思われる。

＊　＊　＊　＊　＊

以上、国文学における電子計算機の利用を情報検索に限定して考えてきた。最後に私の実感をつけ加えさせていただけば、システムの発展のためには、それをささえる国文学の研究の発展と協力体制が必要であり、システムだけの単独の発展はありえないということである。また、国文学研究者の立場で国文学の情報処理を研究しようとする人が現れてほしいと思うのである。さらにすすめて国文学研究に電子計算機を駆使した本格的研究にすすみたいものである。

欧米の日本研究寸見
―海外出張報告―

古川清彦

昭和四十八年九月から十一月にかけて、私は「海外における日本文学に関する研究情報の調査収集」というテーマで二ヵ月間欧米出張の旅をした。昭和四十八年度在外研究員短期研究員甲という資格であるから限られた期間に大きなテーマをかかえ、文字通り駈け足の旅であったが、文部省はもちろん、外務省の便宜供与、在日各国大使館の好意に満ちた御援助等により予期以上の成果を得たことに厚く感謝の意を表したい。旅行中、病気や事故にあわず、貧しい語学力で無事旅程を終えることが出来たのは幸福であったと思っている。外国における大学・図書館・博物館等の相互協力、学校教育と社会教育の関連等についても学ぶべきことが多かった。

海外における日本文学の研究については、『海外における日本研究』（昭四四・三、日本学術振興会）や国際交流基金のパンフレット例えば「A List of Institutions and Individuals in Japanese Studies」（Tokyo, 1973）等が手引きになる他、種々の参考書があり、とくにアメリカの現状については外務省文化事業部の刊行物もある。

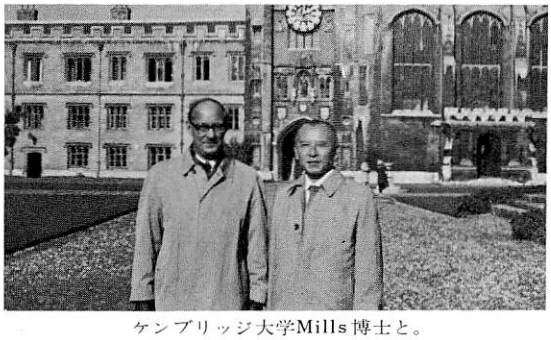
アメリカでは先ずサンフランシスコのカリフォルニア大学の East Asiatic Library の研究室・図書館を見学し、地階に所蔵された旧三井文庫の資料（部分）を見た時は、

史料館との縁故を想起した。なおカリフォルニア大学（バークレー）にはDepartment of Oriental Languagesがあって、日本人の研究室も訪れてみた。ワシントンの議会図書館（The Library of Congress）は噂に聞いたよりもおびただしい量の日本関係資料の収集ぶりを書庫に入って見学した。本館の黒田課長室では、東京の国会図書館から見えた知人との奇遇に驚いたことであった。

ニューヨークのコロンビア大学ではEast Asiatic Libraryを見学し、仏教学者として著名なYampolsky教授に面会し、図書館の甲斐女史、研究室の陳トヨコ女史等ともお会いした。

イギリスでは、ロンドン大学のSchool of Oriental and African Studiesの研究室や書庫をBrian Hickman氏の案内で見学し、新資料（「古今集」等）も見せていただいた。オニール教授（日本文学）のゼミの時間に、都合のつく教官・学生と「国文学研究資料館について」（テーマ）という座談会を持つことができたのは活発な意見も聞けて有益であった。オックスフォードのBodleian Libraryは歴史が古く、書庫には日本関係の部門がある。

ケンブリッジ大学では図書館長の説明があり、広汎な大学全般にわたりMills博士のご案内が懇切であった。


ケンブリッジ大学Mills博士と。

以上のほかBritish Museum, British Library（とくにOriental Manuscripts and Printed Books）を見学した。ライブラリアンDavid G. Chibbett氏の説明や案内で、展示中の「新花摘」「女房三十六歌仙」「錦百人一首東おり」「大雅堂画譜」「竹堂画譜」「夏の富士（歌舞伎）」「吉原青楼年中行事・餅つきの図」「東都勝景一覧」「東の手振（太平有象）」「好色一代男」「伊勢物語」「論語（慶長版）」「成唯識論述記（宝玲文庫）」「長崎絵図」「太織冠」「弁慶物語（奈良絵本）」「青葉（お伽草子）」「源氏物語絵詞」等もみた。同氏は、わが国の国立国会図書館連絡部編集の「びぶろす」等にも寄稿し、英国における日本学の世話役の一人である。

なお英米両国の研究家からの要望事項の中、外国の日本研究者（学生を含む）の日本側における受け入れ態勢のことがあった。これは今後、国際交流基金などと打ち合せて一層の便宜を図るべき問題であろう。

ドイツは戦後の復興がめざましいが、日程の都合で学者に会う機会を失した。しかし、マインツのグーデンベルグ博物館やミュンヘンの州立図書館は参考になった。

デンマークではコペンハーゲン大学図書館や王立図書館を見学した。後者は前庭にキエルケゴールの銅像がある静かな環境で、H.D.Shin氏の案内があった。所蔵本の一部を示すと次のようである。「訓蒙仮字古事記」「温古年中行事」「日本文学全書」「日本歌学全書」「万葉和歌集」「百人一首一夕話」「源氏物語」「分間江戸大絵図」「京大絵図」「神皇正統記」「校註・日本文学大系」等があり、現代日本の作家全集本もある。

コペンハーゲンからはNewsletter of the Scandinavian Institute of Asian Studiesというパンフレットが刊行されており、アジア研究の状況がわかる。ライブラリアンのCarl Steenstrup氏が研究所を案内して下さった。デンマークで紹介あるいは飜訳されている作家は次の人々である。芥川龍之介・谷崎潤一郎・長与善郎・宮沢賢治・吉屋信子・大仏次郎・井伏鱒二・川端康成・小林多喜二・丹羽文雄・船橋聖一・火野葦平・井上靖・太宰治・大岡昇平・遠藤周作・安部公房・三島由紀夫・石川啄木・萩原朔太郎。コペンハーゲン大学のLidin教授がこうした作家・詩人の研究調査に従事しているようである。なお東海大学のヨーロッパ・センターもこの地にあるが、時間等の関係で割愛した。

オランダでは先ずハーグ中央文書館を訪れ、翌日ライデン大学に赴いたが、さすがに日本研究の古い歴史を持っている。ライデン大学の日本学術センター所長は「更級日記」の研究家で有名なフリッツ・フォス博士で、研究所には日本語の看板がかかっている。国立博物館のVan

Gulik, W.R. 氏は博士の門下で、シーボルトの偉業を研究している。シーボルトのコレクションの中には「芭蕉翁絵詞伝」「長恨歌」「三国妖婦伝」「群書類従」「百人一首」「英吉利文典字類」「伊勢物語」「自来也物語」等があって、別室の日本に関する展示物とともにシーボルトの熱意と見識を充分に示している。

フランスのパリには Institut National das Langues et Civilisations Orientales（フランス国立東洋研究所）がある。これは西欧以外の世界諸地域の言語と文化の研究・教育ならびにこれら地域との国際交流の発展に寄与することを目的とする国立機関である。十九世紀には「国立現代東洋語学校」と称していたが、近年の大学制度改革により、現在のように改称し、パリ第三大学（新ソルボンヌ大学）の構成機関となった。日本学科の創設は一八六八年（明治元年）である。その教育方針としては、文化のみならず、外交・経済・科学・技術など多方面にわたる日仏交流の主動力となれる人材を養成することにある。ブローニュの森に接したドーフィーヌ大学の教室で講義が行われていることが多く、本部の図書館には藤森女史がいて、図書の収集等に功が大きい。

国立図書館は、その東洋部門に多くの日本に関する蔵書がある。またアジア会館の書庫で、日本文学関係の部門も見学した。当地の日本館々長森有正氏の存在は有名である。Centre de Documentation Sciences Humaines は人文科学部門の国立情報センターで、文学・宗教・芸術・音楽等を包含していて、文学部門には女子職員が大勢活躍している。最後にフランスにおける日本研究の現状一覧表（昭和四十八年）を記すと上表のようである。

スイスのチューリッヒ大学には、Ostasiatischer Seminar があり、若山淳四郎教授が日本部門担当で、図書室には民俗学関係のものもあった。

イタリアのローマでは、ローマ国立古文書館とイタリア総合カタログ編纂センターを見学したが、とくに後者の大きな規模と建築に感心した。またフランスと同様に幹部に婦人が多いことも注目される。最近、日本大使館等の世話が実って、イタリアにおける日本学研究者の結成が行われた。ミラノ、ナポリ、ローマ等の日本研究家の大同団結なので、画期的な現象と思われる。その事務連絡には、ローマの日本文化会館が当たるのであろう。（参照。岩倉具忠「イタリアにおける日本研究—その現状と動向—」『びぶろす』一九七二年一二月）

フランスにおける日本研究の現状

機関名	日本関係教員	日本学専攻学生数
パリ第三大学国立東洋言語文化研究所朝鮮日本学科	一九人	六三一人（学部 六〇〇人 大学院 三二人）
パリ第七大学東アジア言語文化（教育研究単位）日本研究所	一二人	一四二人（学部 一三一人 大学院 一一人）
リオン第二大学イタリア、スラブ圏、ルーマニア、極東（教育研究単位）日本語講座	一人	四五人　全員学部
高等研究実用学院	五人	
セーブル高等学校	一人	約一〇人
ラシーヌ高等学校	一人	約一〇人

その他の施設。ギメ東洋美術館、チェルヌスキー市立東洋美術館等。民間、天理日本語学校約二〇〇人。

私の七月

福田秀一

七月は私にとって大事な月である。大学院を出て（正式には「満期退学して」）から十年余り、ずっと私学にいて、「税金は払うけれども税金の厄介にはならない」と豪語（？）していた私が、当館に赴任して国家公務員となったのが、一昨年の七月一日だからである。

その時は、創設四年目でまだ卒業生も出していない新設学部、特に私

にとってはかつての恩師や友人も多く、親しさや居心地のよさこの上ない職場を去る一沫の淋しさもさることながら、これからは春夏も大学のようには休めないサラリーマン的な生活になるのだ、一応毎朝きちんと満員電車で通勤しなければならないのだ、といった覚悟や悲壮な（？）決意の方が大きく、とにかく毎朝決まった時間に起きて出かけることに精一杯であった。ただ、あらかじめ自らに言って聞かせた覚悟の故か、それとも緊張の効果か、あまりこれを強調して精神主義者に利用されても困るけれども、その夏は思いの外にバテず、そして夏が終っても疲れも出ず、私の当館勤務の滑り出しは、少くとも肉体的には順調であった。もちろん、勤務の実態・内容は、いわゆるサラリーマンとは大分違うところもあるが、丁度世間―少くとも大学の先生方が夏休みに入ろうとする時に、そして近年は次第に企業も夏休みを取入れつつある趨勢の中で、それに背を向けて汗をかきながら毎日出勤するのは、少し大げさに言えば国家百年の事業の礎のためであり、そして自分は進んでそこに飛込んだ殉教者の一人なのだという、いささかのヒアロイズムに生き甲斐をなぞられたことがあったのも、事実である。実際「夏休み」のない生活というのは小学校以来初めてのことだったから、その位オーバーに自己暗示をかけなければ、熱でも出しはしまいかと思ったのである。

けれども、案ずるより生むが易しで、それに根が楽天的だから、かなり忙しい毎日の生活にも、直き慣れた。そしてまた、忙しいということは生き甲斐・働き甲斐があるということでもある。それが創設期の当館としてどれだけ有益かという客観的な判定はむずかしいであろうが、「天の時、地の利」はともかく、評議員・収集計画委員・調査員の各位や資料所蔵者その他関係各方面の御協力と御配慮、それに館員われわれの努力を含めた「人の和」を得て、最近はある程度創設期としての軌道に乗ったと言ってよいかと、私は思っている。

その点では、一年前の今ごろよりは大分進んでいるような気がする。実は去年の七月初めには、私は当館に就任しての一周年をはっきり意識して、いささかの思いにふけったのであった。まだ、私が―と言うよりも館が、少くとも当部（文献資料部）が―十分業務に慣れていなかった、（と、今からは思える）ためもあって、それまでの一年間、調査報告などは沢山頂いたけれども、開館に備えての急務の一つである収集（マイクロ撮影）などについては何をしてきたか、その成果の乏しさをかえりみて、大いに反省もし、悩みもしたのであった。

ところが今年は、七月一日に私の記念日を祝う（？）のを忘れ、七月一杯〆切というこの稿に取りかかろうとして、初めて私における七月の意味に気づいた次第である。これは一体どう考えたらよいか。

一つにはやはり、今も書いたように、日常の業務がある程度機能化して軌道に乗ってきたことによるであろう。当館がいかにあるべきか、当館の調査・収集（主としてマイクロ撮影）は何をどのようにすべきであるか、といった根本問題は無論重要であり、それに対しては当初はある程度試行錯誤も止むを得ないと、館長のお墨付も頂いているし、実際こういった問題には唯一絶対の回答はあり得ないようにも思うが、いつまでも試行錯誤ばかりでいることは許されず、好む好まぬは別として、今はテストから営業用の試運転に入った段階と言ってよいであろう。例えば各本の調査すべき項目とその処理の仕方において、又各文庫への収集出願の手順とその実行の方法について、等々。

ただ、業務がある程度軌道に乗ったと言っても、そして私がいくら楽天家でも、いわば私なりの一大決心をもって当館に赴任した記念日（？）を、三年目にして早くも忘れるというのは、いくらか不思議である。そこで思うに、この七月はかなり忙しく、去年のように感慨に浸っている暇がなかったようにも思うのである。そこで以下、この七月の初めに私が館の仕事として何をしたかを、日記風に思い出してみる。

二日（火）――上野発八・〇〇の「もりおか一号」で水戸へ。彰考館本の第五次（本年度第二次）収集（撮影）の初日で、同館本の収集に際しては、毎度初日には当館（今までのところ私）が顔を出す約束になっているのである。今回の収集書目は、物語・日記・古浄瑠璃・仮名草子など約二百点で、所要日数約十日間の見込。そのリストは既に先方には送ってあるが、当部用と業者用の各一部、それに撮影用ターゲットが鞄の中で結構重い。業者は水戸の近くに

出張所のあるT写真で、撮影用のリストとターゲットは予め館に呼んで渡す時もあるが、今回は間に合わなかったのである。

大量に出納して下さる労苦への心ばかりの謝意に、上野駅で「江戸おかき」を一罐求め、急行電車に一時間も揺られて水戸駅へ着くと、例によってT写真の車が来ている。重いカメラを運ぶためであるが、私も便乗する慣例である。ところがこの日はカメラマン氏が上野八時に乗り遅れた旨電話があった由で、大雨の中を先ず私だけ彰考館へ送って貰い、学芸員のT氏に挨拶。

この雨で果して書庫に入って本を出して頂けるかと心配したが、T氏も毎度のことですっかり慣れて、既にお送りしてあったリストの順に本を用意して下さってあった。別室から、リストの一頁分ずつにした山を閲覧室に運んでは、順に机の上へ置いて行かれる。私はそれを改めてリストと対照しつつ、出なかった本―大方は、戦災で焼失したものを、こちらが誤って出願してしまったもの――をチェックする一方、ターゲットの書名・冊帖数・刊写の別や年代等を現物と照合して、ターゲットに必要な限りの加筆修正を施した上、そうしたターゲットを各本の冒頭近くに挟む。カメラマンが表紙に先立ってそれを撮影するためである。

ターゲットは、通例収集出願リストから作る。そのリストは元来調査報告を基にすべきであるが、目下のところは既刊目録を基にしている場合も多く、彰考館もそれである。従ってその場合、ターゲットの精粗は原目録に規制されることになり、彰考館本でも、装訂や刊写の年代はターゲット作成時点には分らない。そこで右に言った「加筆」にはこの点が必要となる。すなわち、当館では今のところ巻子本は「軸」、列帖本などは「帖」、袋綴本は「冊」をもって数えることにしているので、冊帖数の欄はこれらの助数詞のどれか一つを選んで○で囲まねばならない。これが案外手間取るが、その過程で冊帖数が正確かどうか神経を配れて却って良いとも言えよう。刊写年代の方は、時に考え込むこともあるが、分らなければ分る範囲でと割切って、「江戸(刊)」とか「江戸初中期(写)」とか、蛮勇を振って記入しておく。

この作業をしている間に、改めて迎えに行った車でカメラマンのK氏到着。聞けば昨日の朝、半月ばかり続いた当館の仕事で酒田から帰り、昨日も一日その跡始末があったため、つい寝坊して乗り遅れた由。さもありなんと同情した。

その後昼を挟み、カメラを組立て、ライトやピントなどを調え終ったK氏に、撮影の順序やフィルムに半端が出た時の処置などにつき注意、間紙(あいし)を入れる必要のあるものの見当づけや、折本の撮影の順序(表から先)などを指示して、一日分の公務を終り、泥濘の中を宿舎へ向う。

三日(水)――早朝水戸発、水郡線経由で会津若松へ。ここで、先年一見した市立図書館に改めて当館としての挨拶に立寄り、「概要」を渡して当館の趣旨を述べ、和本類の所蔵状況を拝見して後日の調査・収集の下づもりをする。数日前電話で一応予告はしておいたが、館長は急用で不在。しかし資料係長I氏が親切に応対・案内して下さる。当館としての必要資料は必ずしも多くないが、不日調査の要を感ずる。

午后、大雨の中を磐梯高原・スカイバレー経由のバスで米沢へ。市立図書館で北海道東北地区の調査員諸氏が共同調査(近日当館収集のため)をして下さっており、その挨拶と収集打合せのためである。徳田助手は先着の筈。荒天の故か、途中から乗客は私一人。夕方近く米沢駅へ着いて、タクシーで図書館にかけつけ、W館長(昨秋お訪ねして、今回のことは大凡お願いしておいた)と一しきり御挨拶。県図書館協会大会の準備で特に忙しい時期に当館の調査が入って恐縮する。そうこうする中に本日に予定した調査は終ってしまい、調査員諸氏には申し訳ないことをした。

蒸暑い中を御苦労だったと思うが、特に列帖装の「源氏物語」と謡本とは糸が切れて錯簡が起っており、文章の続きや内容からそれを訂すのに骨が折れ、それでも糸を外して直さねばならぬ(従って今回は手を下すのを控えた)箇所が「源氏」に一つある他、謡本の方はその方面に明るい人でないと続きの分らぬ箇所が多く残っている由。収集の際に、そうした調査員の協力を乞うことにしたいと思う。去年東大国文学研究室本の収集の時にも、やはり「源氏」で同じことがあり、その時も折よく立会指導の調査員(当時は収集員)に人を得て正しい順序に撮影することができたが、こうしたケースにたびたび出会うにつけ、調査員に負うところの多いことを感ずる。

四日(木)――午前、市立図書

館本共同調査の第三日。予め出願したリストの外に、林泉文庫本を多数拝見。調査員が多く二人一組となって、一人が寸法や丁数を数え上げ、もう一人がカードに記入しておられる。中で、目録に「物語・写一冊、多く〈昔男ありけり〉で始まる短い章段百全から成る」とかいう風にあったものは、案の定「伊勢」の一本であった。

午后は、近くの山形大学工学部の会議室で北海道東北地区調査員会議。木造ながらどっしりした明治建築の一室で、暫し俗念を忘れて調査員諸氏の熱心な計画や真剣な質問、有益な示唆を承り、夕刻解散。

列車の都合でもう一晩残られる方や上り列車で一旦福島へ出られる方々と別れて山形へ向い、駅前でそれまで御一緒だったF調査員ともお別れして、予約しておいたホテルへ向う。明日は帰京し明後日からまた出勤だが、前任校で相手してこの二月に私も招かれ当地で挙式した教え子が、明日ホテルのロビーへ会いに来る約束になっているのだ。帰れば、来週の鶴見大の収集や再来週の蓬左文庫の調査打合せと中京地区会議の準備、三手文庫の収集の交渉、その間を縫ってマイクロ・建築その他の委員会など、いろいろと予定が詰って忙しいから、今夜は少しくつろいで英気を養い、帰ってからの仕事に備えようか。

文献資料部事業報告

大久保　正

本誌前号には、昭和四十八年六月末日までに当部で行った事業の概要について記したので、今回は同年七月一日以降、四十九年六月末日までの事業経過を報告する。文献資料部では開館に備えて、現在文献資料のマイクロフイルム収集にもっとも努力を傾注しているが、所蔵者の意向もあって、必しも道は平坦ではない。しかし、大方の理解により、全体として軌道に乗ってきた感が深い。

昭和四十八年度（下期）

一、国文学文献資料調査員・収集員愛知・三重特別会議の開催

昭和四十八年七月十八日、名古屋大学本部会議室において、刈谷市立図書館の綜合調査、名古屋大学、神宮文庫等の調査計画について協議するため、愛知・三重地区の調査員・収集員に参集いただき、特別会議を開催した。当部からは松田・福田の両名が出席し、刈谷市立図書館の綜合調査、神宮文庫調査等の本年度実施が決定された。

また、十月十日、三重大学本部会館において、刈谷市立図書館綜合調査の検討、収集計画等について協議するため第二回特別会議を開催、当部より松田が出席した。

二、刈谷市立図書館綜合調査の実施

八月二十一日から二十六日まで、六日間にわたり、刈谷市立図書館の好意による綜合調査を実施した。参加人員は、後藤重郎調査員ほか十名で、所期の成果を収めることができた。

三、北海道・東北地区調査員会議の開催

九月十一日、酒田市中央公民館において開催。各調査員より本年度における文献資料所在調査の状況について報告が行われ、今後の調査計画・方針等についても協議された。当部からは、福田、杉山の両名が出席した。

四、中部・近畿地区調査員会議の開催

十月十八日、京都大学楽友会館二階一号室において開催、当館における本年度の調査収集方針の説明、各調査員の調査状況報告がなされ、種々意見の交換が行われた。当部からは松田が出席した。

五、中国・四国・九州地区調査員会議の開催

十月十八日、九州大学本部第一会議室において開催。種々意見の交換が行われた。当部よりは日野が出席した。

六、関東・甲信越地区調査員会議の開催

十月三十一日、当館会議室において開催。各調査員より本年度の調査報告について報告があり、今後の調査収集計画についても種々協議が行われた。当部からは全員が出席した。

七、国文学文献資料調査員および収集員協議打合わせ会の開催

四十九年一月二十五日、学士会館三階大集会室に調査員、同館二階大集会室に収集員の参集を求め、昭和四十八年度の調査収集結果について報告を受けると共に、個別的に打合わせ、協議を行った。

八、国文学文献資料収集計画委員会の開催

四十九年二月二十六日、当館会議室において昭和四十八年度第二回の委員会を開催し、本年度の文献資料概要について説明し、質疑応答が行われた。また、今後の収集計画についても有益な助言があった。

九、国文学文献資料調査報告書の刊行

昭和四十七年度における文献資料調査員および収集員による調査収集結果報告書に基づき、『国文学文献資料所在調査仮目録・昭和四十七年度』（A5判、三〇一頁）を刊行した。

十、昭和四十八年度文献資料調査および収集の概要

四十八年度において文献資料調査員・収集員に委嘱した文献資料調査、および収集については、調査員・収集員の全員に「文献資料調査結果報告書」・「文献資料収集計画書」を提出していただいた。その結果、当館の文献資料収集の基礎資料として、全国各地における文献資料調査書目カード約三、四〇〇枚を提出していただき、約八、二〇〇点の文献資料の所在状況、収集の可否等を明らかにすることができ、四十九年以降における当館の収集計画に多大の寄与を得た。また、蔵書目録（一五点）、研究紀要数（二六点）の収集にも御協力いただいた。

次に、昭和四十八年度に、調査員・収集員の御協力を得て当部で収集し得たマイクロフィルム・紙焼写真の概況は左の如くである。

1 東京大学国文学研究室
「新撰菟玖波集」ほか三四七点
2 名古屋大学附属図書館
「和漢書籍名目」ほか二三八点
3 名古屋大学国文学研究室
「紀記歌集」ほか一五二点
4 京都大学国文学研究室
「古今俳諧明題集」ほか二一五点
5 香川大学附属図書館
「六百番歌合」ほか三七点
6 内閣文庫
「竹取物語」ほか九五点
7 宮内庁書陵部
「安芸集」ほか三九八点
8 高松宮御所蔵旧有栖川宮御本
「新撰和歌」ほか二三六点
9 都立日比谷図書館
「ひがし山」ほか一六四点
10 伊賀上野市立図書館
「猿蓑」ほか一一七点
11 酒田市立光丘図書館
「井蛙抄」ほか一一三点
12 武雄市鍋島文庫
「源三位頼政集」ほか一二〇点
13 長野市所蔵旧真田家本
「古今和歌集」ほか一八点
14 長野県立図書館
「松心集」ほか一五九点
15 彰考館
「後拾遺疑難」ほか二八三点
16 本居宣長記念館
「古事記伝」稿本ほか五三点
17 和中文庫
「百人一首抄」ほか一〇七点
18 初雁文庫
「古今和歌集」ほか一六〇点
19 東洋文庫
「貞女白無垢」ほか二三七点
20 既製マイクロフィルム（購入）
大神宮故事類纂　三二点・大東急記念文庫・江戸文学総瞰九五点、大東急記念文庫・物語文学総瞰八七三点、静嘉堂文庫・国語学資料集成四六四点、東京大学附属図書館洒竹文庫マイクロフィッシュ二千枚。

昭和四十九年度（上期）

一、国文学文献資料収集計画委員の委嘱

昭和四十九年度収集計画委員は、前年度委員十名に留任を願うことに決定、四月一日付をもって発令された。

二、国文学文献資料調査員の委嘱

昭和四十九年度から、従来の文献資料調査員・収集員を、文献資料調査員の名称をもって統一することとし、北海道・東北地区九名、関東地区二十六名、中部地区二十五名、近畿地区十七名、中国・四国地区十一名、九州地区八名、計九十六名の方々に委嘱し、四月一日付をもって発令された。（後二名追加）

三、国文学文献資料調査員会議（総会）の開催

五月二十一日、同二十二日の二日間にわたり、公立学校共済組合本部大会議室にて文献資料調査員会議（総会）を開催した。議事は左の通りであるが、本年は当部において「国文学文献資料調査要領」を作成配布し、各地区における調査方法の統一整備を図ることについて活発な討議が行われた。

第一日議事
(一)昭和四十八年度文献資料調査収集結果について
(二)昭和四十九年度文献資料調査員委嘱について
(三)昭和四十九年度文献資料調査収集計画について
(四)当館からの要望

第二日議事
(一)国文学文献資料調査要領について
(二)各地区における調査について
(三)その他
なお、当館からは、文献資料部全員のほか、館長、研究情報部長、管理部長、各課長、関係事務官が出席した。

四、特別講演の実施について

文献資料調査法研究に資するため、五月二十二日左の講演を実施した。文献資料調査員、本館関係教職員が出席して多大の感銘を受けた。
特別講演　「書物の装訂について」
東京教育大学名誉教授　山岸徳平

五、国文学文献資料収集計画委員会の開催

六月二十五日、当館会議室において第一回収集計画委員会を開催した。議事は左の通りであるが、四十九年度事業計画について、種々有益な助言をいただくことができた。
(一)昭和四十九年度調査員の委嘱について
(二)昭和四十九年度事業計画について
(三)その他
なお、当館からは、文献資料部全員のほか、館長、研究情報部長、管理部長ほか関係事務官が出席した。

六、北海道・東北地区文献資料調査員共同調査、および北海道・東北地区会議の開催について

七月二日より四日まで、北海道・東北地区関係文献資料調査員による米沢市立図書館共同調査を実施し、あわせて七月四日、山形大学工学部会議室において、北海道・東北地区会議を開催した。会議では、米沢市立図書館共同調査結果の集約のほか、本年度の同地区における調査収集計画について討議が行われた。当部からは、福田・徳田の両名が出席した。

七、国文学文献資料調査員中国・四国地区会議の開催

七月六日、香川大学本部五階第三会議室において開催、本年度同地区における調査収集計画について説明・討議が行われ、金刀比羅宮図書館、高松市松平公益会の調査収集について具体的な打合わせがなされた。なお、当部からは、日野・伊井の両名が出席した。

八、国文学文献資料調査員九州地区会議の開催

七月十日、九州大学本部会議室において開催、当部から松田が出席、また館長も同席した。本年度の九州地区における調査収集計画について説明討議が行われ、九州大学附属図書館等の文献資料調査、および収集がこの会議を通じて具体化することとなった。

九、国文学文献資料調査員中京地区会議の開催

七月十六日、名古屋共済会館において開催、当部から福田が出席、館長、管理部長も同席した。福田から蓬左文庫の調査とその方法・計画等について説明があり、また昨年度に引続いて刈立市立図書館等の共同調査を本年も実施することなどについて話合いが行われた。

研究情報部事業報告

古川清彦

研究情報部は「国文学に関する研究文献及び研究に必要な情報の調査研究及び収集を行い、並びに国文学に関する文献その他の資料の整理、保存及び閲覧を行う（史料館の所掌に属するものを除く。）」ことを任務とする（「国文学研究資料館組織運営規則」）。共同利用機関として国の内外の利用者・研究者を対象として(一)閲覧体制、(二)共同利用研究者、(三)学会との関係の三点に留意しながら開館に備えているのである。昭和四十九年度になって、従来不十分であった定員もかなり整備され、「国文学研究資料館組織運営規則」に基づく情報室・整備閲覧室・編集室・参考室・情報処理室の五室による研究情報部の体制がようやく四月十一日から全面的に実施される運びとなった。（「国文学研究資料館の内部組織に関する訓令」）

人事としては昭和四十九年四月一日付で文部省大学学術局付より情報室に山中光一助教授が、また同日、整理閲覧室に島原泰雄助手が、編集室に岩下武彦助手が、参考室に内田保廣助手が着任した。また同年五月一日付で、情報室長に山中助教授が、整理閲覧室長に本田助教授が、編集室長に岡助教授が、参考室長に本田助教授（併任）が、情報処理室長に古川（併任）が発令された。

一、情報室

情報室は、「国文学に関する研究

文献および研究に必要な情報の調査研究および収集を行う。」こととされている。

現在、情報室は、各大学・出版社等に協力を依頼して、雑誌・紀要等八一一種を継続的に収集しているほか、全国新聞五紙、地方新聞十紙から国文学に関する情報を抽出整理し、また学会・図書館・出版社等の研究情報や文献に関する活動の情報を収集している。

また、国文学に関する研究機関・研究者・学会・図書館・出版社等（何れも外国のものを含む）、情報源に関する資料ファイルを整備し、館内の業務上の利用に役立てるほか、今後の『年鑑』の編集、参考業務（レファレンス・サービス）、案内業務（クリアリング・サービス）のための基礎資料とするよう準備を進めている。

なお情報室は、情報を収集するだけでなく、館の活動に関する情報を利用者等外部の人に広く知っていただくため、館内各部の協力を得て、「館報」の発行の仕事にも当っている。「国文学研究資料館報」は従来は年一回の発行であったが、昭和四十九年度からは年二回発行する予定である。

また東京女子大学に事務局をおく「国語国文学会連絡協議会」の隔月の会合には情報室から出席、学会の情報・意見を収集している。なお「国際交流基金」等との連絡を密にして、国際情報の摂取に努めている。（古川は別稿のように、四十八年九月から十一月まで海外における国文学の研究情報の調査収集のため欧米に出張した。）

二、整理閲覧室

整理閲覧室は、「国文学に関する文献その他の資料の整理、保存および閲覧を行う。」こととされている。

㈠　資料整理の手順、方法、閲覧体制の検討のため整理閲覧準備委員会（昭和四十八年）、整理閲覧委員会（本年）が開催され、その事務処理を行った。議題・日程は次の通りである。第五回整理閲覧準備委員会、図書の受入れ、登録・整理について（昨年七月二十五日）。第六回、文献資料部より研究情報部への資料の流れについて（九月五日）。第七回、マイクロフィルムによる資料の収集と整理について（十月十一日）。第八回、閲覧について（一月九日）。

本年一月より各部および史料館からそれぞれ委員二名を選出して整理閲覧委員会が発足した。第一回、図書資料の購入手続きについて（一月二十五日）。第二回、委員会規則成文審議（二月五日）。第三回、閲覧に関する基本問題の扱い方（二月十五日）。第四回、マイクロフィルムの閲覧について（三月五日）。第五回、マイクロフィルムの閲覧方式（三月二十八日）。第六回、閲覧に提供する資料について（四月十六日）。第七回、収集したマイクロフィルムの保存・利用・提供について（五月七日）。第八回、これまでの審議経過のまとめ（五月十五日）。以上の結論を館長に報告した。

㈡　寄贈された紀要等約八百種の製本、逐次刊行物仮目録（昭和四十八年十月）の作成を行なった。また中世文学会事務局（日本女子大学）、俳文学会事務局（成城大学）、東京大学図書館より雑誌の寄贈を受入れた。そのほか故金田一京助博士御遺族から図書の御寄贈があった。

㈢　日常の業務として寄贈・購入図書の受入れ整理、書庫配架の検討を行っている。

㈣　本年度に入ってマイクロフィルムの整理に着手し、収集されたマイクロフィルム全点について閲覧用としてポジフィルム、又は紙焼写真本を作成すべく、これに関する諸問題を検討中である。すなわち、(1)マイクロフィルム原簿・作品毎の閲覧用カードを作成し、(2)マイクロフィルムの保管・配置について検討し、(3)また閲覧に関して所蔵者（原資料の）と契約、打合せのため、文献資料部・管理部と連絡協議している。

なお整理閲覧委員会で考えることであるが、閲覧規定においては、館の性格や利用者のことを充分配慮し、(1)マイクロ所蔵者との契約・交渉、(2)閲覧体制、(3)資料の種類、等の項目が検討される予定である。

三、編集室

編集室においては「国文学に関する索引、目録その他の参考図書の編集および刊行を行う。」とされている。

当館においては将来種々の研究文献の編集刊行が企画されているが、昭和四十八年度には、四十七年度にひき続いて国文学研究文献目録編集委員会の協力を得て『国文学研究文献目録』（昭和四十六年）の編集刊行を行い、併せて、四十七年の目録の企画・編集（四十九年秋発行予定）を行った。国文学研究に関する総合的な目録は、昭和三十八年から四十五年までの八冊（年一冊）が東京大学国語国文学会から出版されており、当館の目録は、それに続くものであ

る。目録は、雑誌紀要論文目録・単行本解説・索引から成り、論文目録は当館所蔵の紀要等を中心に、館外の大学・図書館等の資料で欠を補い、また単行本解説は文献目録委員の執筆になる。この目録は近々、『年鑑』（昭和四十九年度版、五十年度発行予定）として編集することを企画している。なお文献目録委員会は四十八年は八回開かれ、四十七年からの委員、浅井清・久保田淳・篠原昭二・曾倉岑・山口明穂、新委員として大矢武師・瀬戸仁・浜野卓也氏等八名の方の協力を得た。

なお現在編集室では、『国文学研究文献目録』（四十八年版）の編集、当館の「紀要」の編集、また文献目録委員会の事務処理を行っている。

四、参考室

新設の参考室は、「国文学に関する参考業務を行う。」と規定され、本館の性格を考えながら、参考業務の企画、参考用資料の検討を行っている。また秋に開催される本館主催、国語国文学会連絡協議会協賛、朝日新聞社後援の第三回公開講演会も準備中である。

五、情報処理室

同じく新設の情報処理室においては「研究情報部の所掌事務の処理に関する電子計算機の運用およびこれに必要な調査研究を行う。」とされる。

(一)、昭和四十八年八月～十二月。国文学情報検索システム開発のテストの実施、語彙検索のシステム開発として『平治物語』（テキスト古典大系本）を対象として、Ⓐ総索引・人名索引の作成、ⓑＫＷＩＣ索引（文脈つき索引、抽出対象語を名詞のみに限定）の自動作成を試み、ほぼ満足できる結果を得た。

(二)、四十九年一月～三月。国文学情報検索に関する研究。

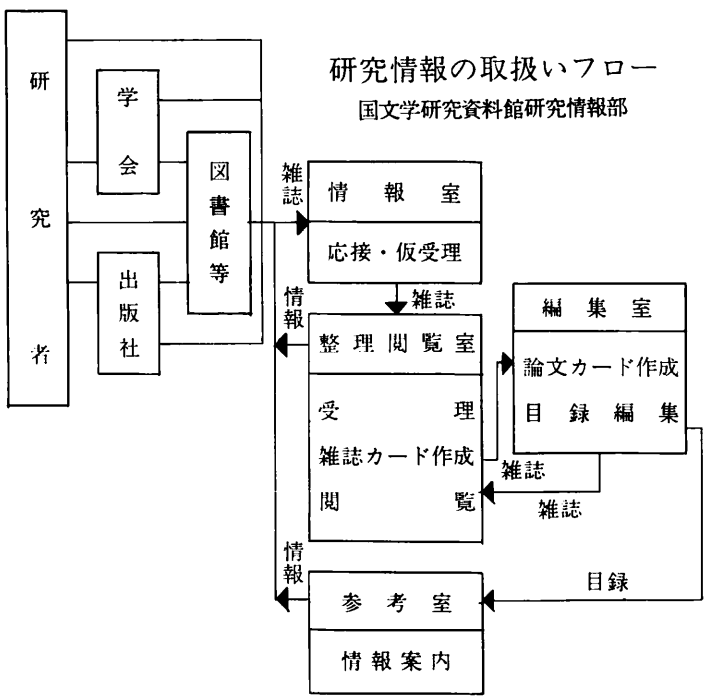
(三)、四十九年四月～六月。概算要求のための導入候補機種の選定。

(四)、四十九年七月以降は、入出力設計、漢字処理システムの検討、コンピュータ運用システムの研究、入出力用漢字字種選定作業、索引語の研究等をすすめている。

以上は情報検索委員会（委員長、四十八年度国井利泰氏、四十九年度水谷静夫氏）を設け、その指導を受けながらすすめている。なお委員会は、昨年十月二日、十二月十三日、本年二月十四日、四月二十五日、六月六日、九月十九日に開かれた。

なお、図書受入システムの研究・開発、利用者の動向調査等のほか情報検索委員会の事務処理にも当っている。

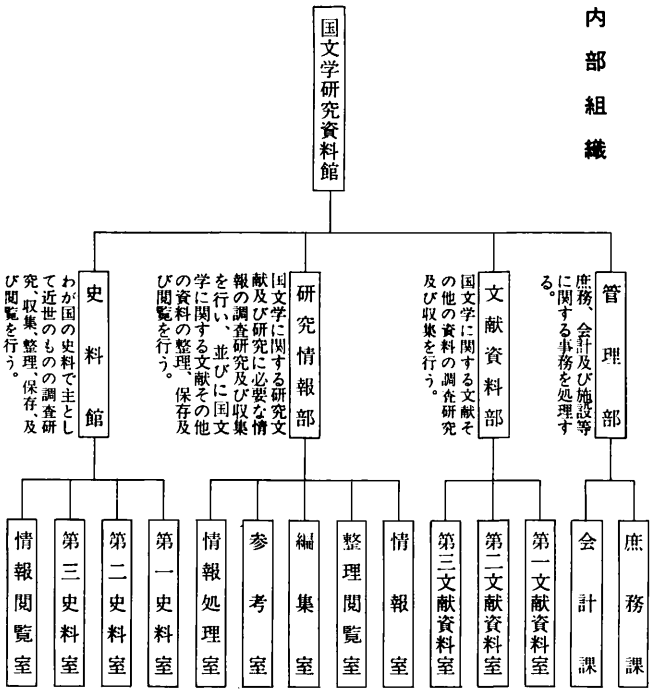
以上で事業報告を終るが、わが研究情報部は国際的文化交流の中で学界を中心とする利用者のために設けられた真に新らしい部門・組織であって、教官は勿論、特にこの部に所属する司書・事務官等も一体となってきびしい創設の事業にとり組んでいる。部の業務上の分担は部および各室の法的性格を堅持しつつも、今後細部にわたり各方面の声を聞いて検討しなければならないが、さしあたって今日までの体験と熱心な部内の討議に基づいて左図のようなフローで処理・計画されているので参考までに掲げる。



国文学研究資料館の内部組織に関する訓令の一部改正について

国文学研究資料館の内部組織に関する訓令が、研究情報部の整備充実のため四月十一日付けで一部改正され、新たに編集室・参考室・情報処理室の三室が設けられた。それぞれの所掌事務については、編集室は、国文学に関する索引、目録その他の参考図書の編集及び刊行を行うこと、参考室は、国文学に関する参考業務を行うこと、情報処理室においては、研究情報部の所掌事務の処理に関する電子計算機の運用及びこれに必要な調査研究を行うこととされている。組織表は次のとおりである。

内部組織



国文学研究資料館職員名簿(抄)

(昭和四九年九月三〇日現在)

館長
市古　貞次

管理部
吉野　幸夫
*金坂　勲　宮崎　久敬
西村　瑞夫　村瀬　庄蔵
福島　壮敏　寺尾　昌剛
三好　明　草壁　貞二

文献資料部
大久保　正
松田　修　伊井　春樹
福田　秀一　日野　龍夫
杉山　重行　*徳田　和夫
加藤　定彦

研究情報部
古川　清彦
*山中　光一　本田　康雄
岡　雅彦　和田　英道
*島原　泰雄　*岩下　武彦
内田　保廣　田嶋　一夫

史料館
鈴木　寿
榎本　宗次　鎌田　永吉
中村俊亀智　藤村潤一郎
大野　瑞男　原島　陽一
井上　勝生　鶴岡美枝子
浅井　潤子

(*印は新任者)

国文学研究資料館評議員名簿

麻生磯次　石井良助
臼田甚五郎　大久保利謙
木村礎　児玉幸多
小葉田淳　佐々木八郎
佐藤喜代治　杉本勲
鈴木忠直　手塚富雄
豊田武　中村幸彦
野間光辰　久松潜一
古島敏雄　宝月圭吾
松尾聰　山岸徳平

昭和四十九年度 国文学文献資料収集計画委員名簿

伊地知鐵男　井上宗雄
井本農一　岸上慎二
木村三四吾　久曽神昇
五味智英　西尾光雄
橋本不美男　松本隆信

昭和四十九年度 国文学文献資料調査員名簿

（北海道・東北）

伊藤敬　片野達郎
金沢規雄　野田寿雄
原田貞義　福井貞助
藤田寛海　松野陽一
山木幸一

（関東）

浅野晃　阿蘇瑞枝
有川美亀男　池田利夫
遠藤宏　奥田勲
加美宏　神作光一
桑原博史　小池正胤
桜井祐三　白石悌三
杉谷寿郎　諏訪春雄
谷脇理史　築島裕
栃木孝惟　外村南都子
鳥居フミ子　野村純一
原道生　冨士昭雄
村瀬敏夫　森川昭
山下一海　山田昭全

（中部）

青木紀元　庵逧巌
井上敏幸　岡本勝
北岡四良　久保木哲夫
黒川昌享　後藤重郎
佐藤彰　島津忠夫
鈴木勝忠　滝沢貞夫
田島毓堂　手崎政男
長友千代治　西宮一民
延広眞治　東明雅
樋口芳麻呂　水島義治
美山靖　室木弥太郎
村上學　山下宏明
渡辺綱也

（近畿）

井口洋　石原清志
伊藤正義　乾裕幸
植谷元　榎坂浩尚
片桐洋一　金光洋三
雲英末雄　笹川祥生
信太周　信多純一
多治比郁夫　田林義信
浜田啓介　水田紀久
安田富貴子　山内潤三

（中国・四国）

赤羽学　稲賀敬二
佐藤恒雄　志村有弘
鈴木亨　武久堅
田中常正　田中善信
檀上正孝　松原秀明
山本嘉将　横井金男

（九州）

石川八朗　今井源衛
大内初夫　金原理
棚町知弥　中野三敏
長谷川強　米倉利昭

昭和四十九年度 文献目録委員会委員名簿

浅井清　大矢武師
久保田淳　篠原昭二
瀬戸仁　曽倉岑
浜野卓也　山口明穂

昭和四十九年度 情報検索委員会委員名簿

石綿敏雄　桜井宣隆
西村恕彦　水谷静夫

昭和四十九年度秋季学会開催一覧

研究情報部においては、情報室を中心に国文学に関する研究情報の収集を行っている。その一つとして学会開催を中心にした学界情報の収集がある。いずれは各大学内の学会や同人的小規模の研究会をも対象にしたいと考えているが、今のところ、国文学・国語学に関わる学会のうち、相当数の会員を擁する開放された全国的規模の学会を対象にしている。これらの学会からは、定期的に学会情報が送られてきており、それらをまとめたものが、後に掲げる学会開催一覧である。なお、国語国文学会連絡協議会事務局作成の一覧表を参考にした。学会掲出はアイウエオ順、①事務局（「東京都」は省略）②秋季大会開催日③会場の順に記載

解釈学会①豊島区西巣鴨一―二四―一四教育出版センター内②八月一九日③東京湯島聖堂

近代語学会①世田谷区太子堂一―七昭和女子大学文家政学部国語研究室②一二月七日③昭和女子大学温考館

国語学会①千代田区神田錦町三―一一武蔵野書院内②一一月一六～一七日③名古屋南山大学

古代文学会①浦和市太田窪一―二五―五一八森朝男方②一一月九～一〇日公開講座③共立女子短期大学

上代文学会①文京区白山五―二八―二〇東洋大学国文学研究室②③大会年一回五月に終了

説話文学会①渋谷区東一―一―一実践女子大学国文学研究室②一二月一日③立命館大学

全国大学国語国文学会①千代田区神田駿河台一―一明治大学日本文学八一二研究室②一〇月一九～二一日③神戸甲南女子大学

中古文学会①昭和女子大学日本文学研究室②一〇月二六～二八日③富山大学

中世文学会①新宿区戸山町四二早稲田大学文学部伊地知研究室②一〇月五～七日③北海道藤女子大学

日本演劇学会①新宿区戸塚町一―六四七早稲田大学演劇博物館内②一〇月七日③福岡県飯塚市近畿大学

日本歌謡学会①渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学第二研究室②一〇月五～六日③大阪外国語大学

日本近世文学会①早稲田大学文学部神保研究室②一一月二三～二五日③大阪PL学園女子短期大学

日本近代文学会①小金井市貫井北町四―一―一東京学芸大学教育学部橋本芳一郎研究室②一〇月二六～二七日③上智大学

日本文学協会①豊島区南大塚二―一七―一〇②九月二一～二三日③明治学院大学

日本文学風土学会①昭和女子大学短期大学部高橋良雄研究室②一一月三〇日③昭和女子大学温考館

俳文学会①豊島区目白一―五―一学習院大学国文学科研究室②一〇月一九～二一日③岡山大学

仏教文学研究会①〔西部〕京都市東山区東山七条京都女子大学国文研究室〔東部〕板橋区高島平一―九大東文化大学日本文学第二研究室②③例会が毎月各会場で行われる。

表現学会①名古屋市守山区大森二二八二―二金城学院大学国文研究室②③春季大会のみ

万葉学会①大阪府吹田市千里山東三丁目関西大学国文研究室②一〇月五～九日③大阪成蹊女子短期大学

美夫君志会①名古屋市昭和区八重本町一〇一中京大学国文学研究室②七月二一～二三日③中京大学

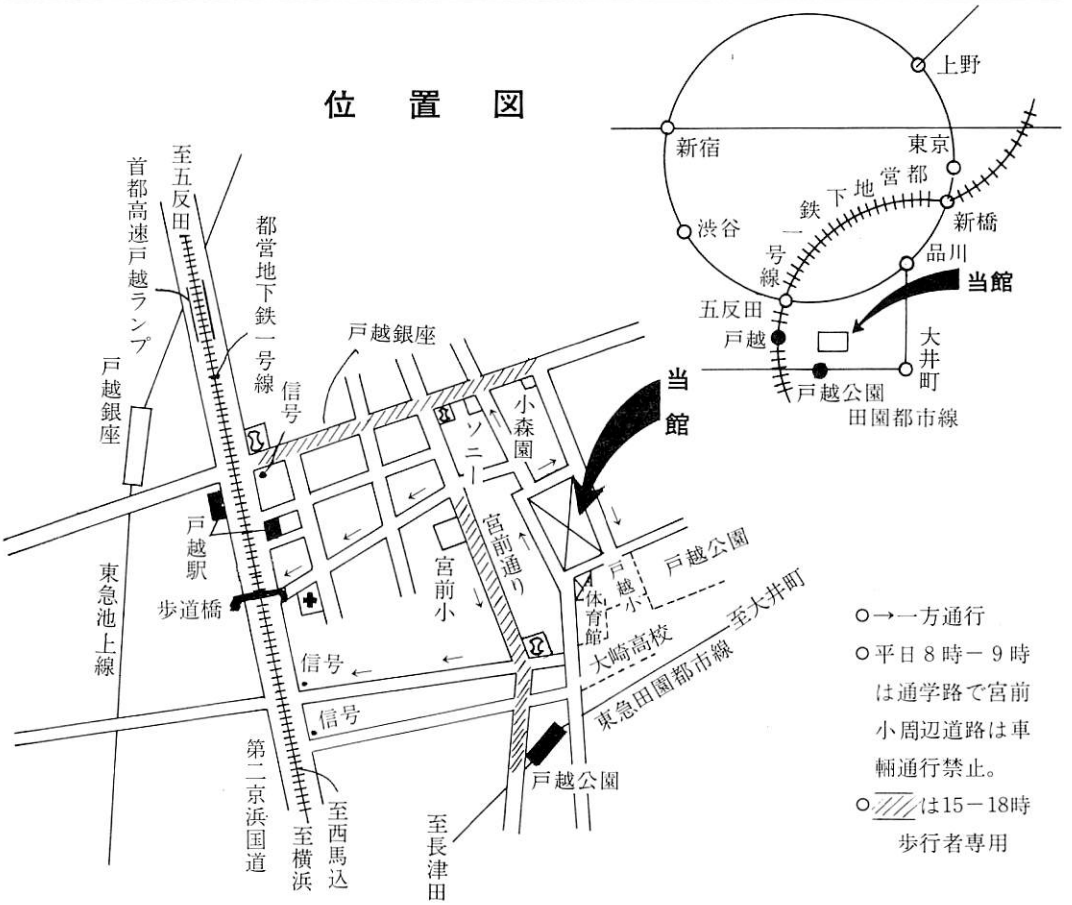
和歌文学会①千代田区三番町六―二二松学舎大学国文学研究室②一〇月一九～二〇日③二松学舎大学

◇編集後記◇

国文学研究資料館も昭和四十七年五月発足以来満二年を経過し、陣容もかなり整い、仕事もようやく軌道に乗ってきたように思われます。

そこで本年度から国文学研究資料館報を年二回発行することになりました。残念ながら総需要抑制のため、建物の建設が遅れ、研究のために本館をご利用いただけるのは、なお先のことになりそうです。しかし、本館は共同利用機関として、その準備的な段階から、できるだけ外部の研究者その他の方々と情報の交流をはかってゆくことが望ましいので、この館報を一層充実してゆきたいと考えております。

位置図



○→一方通行
○平日8時－9時は通学路で宮前小周辺道路は車輛通行禁止。
○▨は15－18時歩行者専用

講演会開催について

当館では恒例の公開講演会(第三回)を左記の通り行いますので御参加下さい。

日時　十一月七日(木)午後六時～八時三〇分
場所　朝日新聞社講堂
　　東京都千代田区有楽町二－三
挨拶　館長　市古貞次
源氏物語をどう見るか　東京大学教授　秋山虔
源氏物語と和歌　歌人・実践女子大学教授　木俣修

◆主催　国文学研究資料館
　東京都品川区豊町一－六－一〇
◆協賛　国語国文学会連絡協議会
　事務局　杉並区善福寺二－六－一
　東京女子大学日本文学研究室内
◆後援　朝日新聞社

国文学研究資料館報　第三号
昭和四九年九月三〇日　発行
編集・発行者
国文学研究資料館
東京都品川区豊町一ノ一六ノ一〇
郵便番号一四二
電話（七八三）九一〇六(代)
印刷所　ウチダ印刷株式会社